

## <東北の本棚> 戦乱の中 愛息守り通す

奥州藤原氏 清衡の母 堀江朋子著

都から派遣された役人による蝦夷地侵略、在地勢力の内紛、と続く戦乱を収め古代東北に百年の栄華の礎を築いた藤原清衡。その生みの母の生涯を軸に、女性の視点で描いた歴史小説だ。「天与の命の大切さ」を問い掛ける。

前九年合戦で、源頼義は敵将・安倍頼時に寝返った藤原経清を生け捕りにし、激しく責めた。

「お前の先祖は源氏の従者だった。元の主人を蔑（さげす）むとは大逆無道」と鑄（さ）びた刀

で、首を切り落とした。鎮守府将軍・頼義は侵略

者にほかならない。経清に後悔はなかった。妻の「亜加」は時に25歳、子の清衡7歳。「亜加、生き延びろ。清衡、大きくなったら戦のない世の中を創るのじゃ」-

愛息を連れて逃亡生活、しかし行く先々で待ち受けていたのは戦乱に続く戦乱であった。

「男たちはなぜ土地や富を争って戦をするのか、なぜ殺し合うのか」、泣き続ける亜加。在地の中心勢力は、やがて頼義と組んだ清原氏に取って代わる。清原氏側から嫡男との縁談が持ち込まれた。「この子を守るために、敵将の妻になってでも生きる方を選ばなくてはならない」。再嫁を決意する亜加。しかし後三年合戦で清原氏は滅亡、亜加も炎の中で生涯を閉じた。

戦史は男の世界の記録でつづられ、「女性たちのことは、文献資料にほとんど残されていない」と著者は言う。一大の英傑に成長、平泉に開府し、中尊寺を建立する清衡。落慶供養願文に「罪もなく命奪われたものたちの御霊を慰め、極楽浄土に導きたい」と記した。壁に金色を塗り、らでんをちりばめた金色堂の創建には、多くの女性たちが関わったと伝える。「清衡は、命を守る女性こそ平和な世を創る力になると信じた。亡き母の思いを体現したのが金色堂だったのではないかと著者は解釈する。

1940年東京都生まれ。作家。2014年から北上市しらゆり大使を務める。

図書新聞03(3234)3471=2160円。

奥州藤原氏  
清衡の母  
堀江朋子

拡大写真